18　文化二年　花供養

底本　月明
校異　綿屋

花供養

（外題・原題簽）

（表紙見返し）

のつと日の出る東山の南無庵
万景一望に尽しておのづから閑
雅の地なり。堂闌更うしこゝに
祖翁の肖像をうつされしよりとしごとに、
弥生十二日をさだめ、普く扶桑の花
を束ねて此精神を祭るものから実
もやゝ其中に備はる。今や蒼虬うし
徳孤ならず。くに／〻／の門葉口に座なり。

序一オ

月に倍せり。ことしはわきて桃桜
庭面狭にひろがり、四海の兄弟共
に像前に手向ものす。　祖翁の
徳はいふもさらなり。うし／＼の
和歌亦かゞやくにあらずや。
惟時文化二乙丑のとし姑洗中の二日

湖西　白鷗居千賀雄謹叙

山ごしに田をもつ人のさくらかな　乙都留
家のうちよりかすむ朝の火　蒼虬
雁がねの立さはぐまで汐さして　升六
何もおはねばさびしかりけり　鷺白
堀かけて根鞭のからむすいかづら　千賀雄
十間ばかり麹ひろげる　百哺
露の夜の月も残さず明はなれ　文常
河鹿とらへる業もあるらん　月峰

一才

袷にも単物にも温泉の匂ひ　魚国

宮にめさるゝ日は雨のふる　其成

桐の木ははたへかまはずふとるなり　葦笠

真間の末寺の仕おくりをする　玉桐

門さしに出れば一おし鴨の声　芦涯

わが恋ほどに石蕗の花もつ　居然

きのふから初音柴舟炷尽し　籬邑

常陸の紙は耳も揃はず　乙道

水うちてまはれば月の早う出て　阿年

一ウ

三人前の菅を刈来る　鼠梅
残なく物の兀たる気比の宮　百磨
鳶の眼も昼過になる　其白
花の雲箱に入たる和名抄　斗雪
薄紅いろのさわらびの灰汁　国雄
春毎に笠を預る樫木原　酔夫
かけたる鐘をわらふ所化達　緑娥
降かとてのぞけば竹の嵐にて　布雪
胞衣をおさめる暁のかね　梅笛

一しきりづゝは腕のいたみたし　銀喬
酒田の船は械も流さず　春草
觜のあほうに長き鳥啼て　田禾
盥すへるも神秘なりけり　相岡
煤たれて目さへわかたぬ大秤　玉洋
泣よるまでの恋もするかな　馬卯
松杉に冬のとゞくぞ便なき　白雪
研すましたる髪剃の月　千明
鵙の声翌乗駕を問に来て　岱李

二才

二ウ

あやめ小路の風わたる秋　木貞
どちからも戸の明たてに山みゆる　芳之
ひとりすておく琵琶うちが妻　玉屑
葉桜に安／＼神輿舁わた　歌雄
蚋をはらふてかへる笹竹　琴斎
谷川のはげしき石もあかのつき　履視
八百はた雲の光る引明　百池
ひや／＼と鏡を袖におしかくし　漢水
盆も過行木辻帯解　駈丹

三才

あの山の間より月がのぼるなり　烏頂
皆一時に出る鯖つり　其如
右一順下略

さゞなみにゆらるゝ岸の柳かな　西湖万木
端〳〵に夜の明かゝるさくら哉　〃　鷺泊
さくらからつい日の暮るむしろ哉　〃　湖音
念仏に霞のかゝる野寺かな　〃　北嶺
田の水の朝〳〵冷るさくらかな　大溝　砂文
　　青楓

三ウ

面白き小家となりし柳かな　一居
雨の間を山吹きりに出るなり　蛙石
有明の月の下散さくらかな　無禁
道ばたは早ちりかゝるさくら哉　田美
鶯に漣見えて松のひま　稀山
梅が香におもき柳の小枝哉　松下
ひや／＼と峰のあらしや初ざくら　獨歩
はつ花にもどれば月も朧かな　可暁
大勢に見らるゝ谷のさくら哉　籬鳥

、
、　僧
、
音羽
、
西湖僧
、　森
、　新庄
、

四オ

山守が家に咲こむさくらかな　千賀雄

松が枝に声のとゞくや田の蛙　太田乙鶴

永き日や鳥の見てゐる八幡山　素人

藪の際まで打ならす畑　獅丸

鯉作る宿の小でまり早ちりて　田禾

盥の底にのこる月かげ　人

かたまつて動きもやらぬ秋の蠅　丸

ひつそりとする町の八朔　禾

四ウ

うれあまる草履の数に日もたけて　人
　覗きまはりて松すかすなり　丸
僧正の御座は定る角ばしら　禾
　夷のふりのうつる北浦　人
降出して十日もおなじ雪に逢　丸
　我より先に馬の年寄る　禾
おしつゝむ涙に月のあり／＼と　人
　うきことはりの見ゆる穂薄　丸
うそ寒き小笠かぶりて帰るらん　禾

五オ

九条ほとりの古きひとつ家　人

ちれば咲ちれば咲つゝ花盛　丸

今朝の曇りにかやる蛙子　禾

魚あぶる匂ひの外は春の雨　西湖舟木　獅丸

深山にも咲花ありてしで辛夷　〃　〃　花川

何事も花にまかせて峰の寺　〃　〃　桐川

夕雨や花にしたしき小さかづき　〃　〃　素人

今朝からの風にちり出す桜かな　堅田　文常

五ウ

啼跡の雨は晴たる雉子の声　友鹿
夕虹を日和にしたり蝶の舞　籬邑
花ちりて弥生は闇に成にけり　几頂
人住ぬ家かさくらは月夜かげ　歌維
山里や梅をはなれて雲はしる　于當
春の雁啼ば帰ると思ひけり　五来
うつり行花に桜のさかり哉　蓬皋
三日月に日の暮かねて初桜　倚宇
春の夜の面白ければ猫の恋　宇洋

六オ

何鳥の夜をばたつかす桜かな　　、　三井　千影
我まゝにさくら咲けり長等山　　、　走井　烏頂
連翹やみな一いきに咲そろひ　　湖東八マン芳之
乙鳥がくればこもとく蘇鉄かな　　、　栢翠
水芥空にふきちる柳哉　　、　日野　松蘿
花の香に歩行山城大和かな　　、　水口　蜄州
恙なふ日は入にけりやよひ山　　西湖堅田　五粒
入相の松よりくれて花の山　　、　、　其白
松陰の家は桜の戸口かな　　、　宇杭

六ウ

雁帰る比を山家のなしのはな　、　枝露
すみよしの春は満たる汐干哉　、　美山
山ひとつ後にすへて雉子の声　、　巵當

うらゝかやことに柳は物しづか　若狭食見花雪
よしの山さくらにせまる花盛　、小浜　李兮
二日居てもどりとむなし花の嵯峨　、遠敷　千好
散さくら向ひに家のなき処　、神子浦燕柳
ちり取の塵も花なり谷の庵　、前川　壽卜

美しう桜にさはる朝日かな　　、相田　桃林
鶴たつて夢をみせたり松の花　　、成出　北洋
花の家春を僅にしたりけり　　、　六英
月一つ残して寒しちるさくら　　、生倉　節之
炭焼の春はいつまでちる桜　　、向笠　貫巵

七オ

啼蛙源氏よむ夜の昔ぶり　　越前丸岡甫立
帰る雁夜もふるびたる山家哉　　、　敦賀仙草

七ウ

春の雪むかしがたりの柳にて　かゞ金沢　三京
ちる音にのぞむ流や花つばき　〃　湖南
花椿むすぶの神の祠哉　〃　素羽
かげろふの移りて物の流けり　〃　階涼
大空や名乗て一つ春の雁　〃　赫之
春雨の下に苫家はありにけり　〃　霜屋
覗くほど降春雨と成にけり　〃　友樹
長閑さの家見ゆるなり梅あかり　〃　蘭吹
日の暮て思へば多きさくら哉　〃槐庵　雪雄

行雲やさくらにせまる夜の山　　高松　自明
一日も立し桜の木の間哉　　本吉　兎園
行春をこぼれ初けり竹の蝶　　暮柳舎　車大
長はしの夜のよき事か散桜　　金沢　可方
汐あかり又門あけて山ざくら　　他石
花をみようめこそ人のもてるもの　　九台
日の入をうけた里あり雉子の声　　且古
行春やおなじ顔なき角田川　　一川
降捨た穂屋の芒に梅の花　　圃辛亭　甘谷

八オ

八ウ

岩たゝく水音寒し谷の花　能登黒島　玻井
水もらふ家の軒まで桜かな　〃　加由

山買ふてけふは花見るこゝろ哉　越中富山　蓬山
山の景朧月夜に見なしけり　〃　如岡
ふりかへるあとを霞や妹が許　〃　素六
人影のうつる柳の月夜哉　〃　稲巴
落椿ともにころがる童かな　〃　来誰
気の付ぬ二日の月やもゝの花　〃　東英

九オ

立戻り又見て行ん遅ざくら　烏休
梅が香やむかふ都の不二おろし　如覧
青柳はあれどここらはたゞの家　虚白
白もゝに烏なくなり夕月夜　馬城
傘のひまより桜さきにけり　魯鳥
おぼつかな雲吹ながら春の月　耳洋
木の芽ふく枝より早き夜明哉　俊雄
ちぎれ雲けふは茶摘のはじめ哉　嘉月
鶯の寝所うれしや宵の空　素渓

九ウ

花十日過て来にけり箒売　〃　路月
山陰や花のにほひの月夜めき　〃　鯉有
畑中に暮るも雁の余波哉　〃　二尺
梅の月手にとる庵の夜明哉　〃　里山
川風や山へはいればむめの空　〃　乙居
赤土の手につきやすし花の山　〃　嵐丈

独吟

真昼の花もりあげて桜かな　〃小林　沙麦
もろこの魚の滝壺にうく

一〇オ

うらゝかに月見のむしろ織捨て
　浦松風に露のちりけり
鷹をうつ外山の鐘の明かゝり
　丸額から遣ふ若もの
恋せねどよしの漆の香にかぶれ
　いさご交りにうつくしき庭

雪もきえてもとの野原や涅槃の日　桃台
まぶれ飛鶸よ落花よ一あらし　南交

一〇ウ

酔覚や花にけそりと月が出た　〃　熊峰
山ざとやさくら暮ても人の声　〃　三丸
鶯の二羽来啼てぞ吉日よ　〃　芦洲
四五本の松の高さよ朧月　〃　五湖
はつ花に分別もなきひとり哉　かゞ在越中成美

一日の髭も伸たりはるの雨　越後今町　之斤
十分は散とおもへど山ざくら　〃　魚国
愚にも暮す日のあり花の中　〃　柏崎　平水

一一オ

帰らんとすれば桜のちり初る　〃　其貞
うぐひすの声を拾はん草の中　〃　高田　左琴
大空のそもけしきして梅の花　〃　長岡　宇瓊
一口にいはれぬさくら咲にけり　〃　新潟　喜年
行雁や麓につゞく家のさま　〃　荒井　旭浪

何をしてもあたら桜の山家哉　信州飯田　何頼
太秦の藪木なりけりむめの花　〃　蕉雨
鳳巾あげにゆり芍薬もふまれける　〃　上田　如毛

一一ウ

しみ／〳〵と散日にあへり遅ざくら　上毛浅原　壺半

ちる花にふかいのおもてかぶらばや　〃小保方　詠帰

桜とは申初けり折敷うり　〃小暮　也蓼

たゞ一木みどりの中のさくら哉　〃溜池　可久

白浜をそのまゝ春の月夜哉　〃山之神　是丸

かち栗のいよ／〳〵かたし春の風　〃大原　花柳

余念なや咲花に身はまかせぬる　〃　青蒲

一二オ

古くさき草のちからや梅の花　奥州二本松乙調
どのやうな日にも咲なり梅の花　〃　伊達　為舟
薄雲のそこら明るしやま桜　〃　安達　方静
小男鹿の角見かくれて花の中　〃　鳥石
物足らぬ月のけしきや朝桜　〃　東流
春の月曇れど雨の沙汰もなし　〃　津軽　文石
黄昏を寝て見れば花の動くなり　〃　里川
水上はしづくなるらん春の川　〃　一棹
曲水や鵜も放したき此流れ　〃南部宮古北溟

一二ウ

花の山松はまばらの影法師　安房礒村　楚流
長閑さや男交らぬ桑ばたけ　下総結城　晛斎

花ちりてはづかしき程寝られけり　相州五柏連南謨
花盛こゝろに何もなかりけり　〃　紅水
咲みたす花や命の山かづら　〃　松調
花の山釼は光る世なりけり　〃　正二
鶯も花も物かはくさのいほ　〃　丈水

一三オ

日の影ものびて摘るゝ土筆かな　江戸　吾丸
青柳や屋根から見ゆる人の庭　〃　上野　秋守
横笛の遠音に花のちる日哉　江州日野在武州亀使
木魚うつこだまにくれぬ花曇　武州　柳紅
七賢もうかれ出るか花の宴　〃　山哺
汐時や花にみち干の硯石　〃　悠々
ちる花に交るや礒のうつせ貝　〃時雨庵　嘯谷
三つが三つ鶴のふりむく春の風　尾州名古屋梅間

一三ウ

よし野にて

飛込で花の衾に夢を見ん　　、安井　野雀

蕉翁のむかしをしたひ、伊勢の国

多度といふところにいたりて

宿とりて三日雨見る柳かな　　、　五道

よしのにて

大空にとゞくやうなり花の山　　、　大蘇

青柳は見る度ごとに動きけり　　、　鹿野

雨晴て世は梅が香と成にけり　　、名古屋湖風

行春の闇を寝に寄る小鳥哉　　、　六車

翌はまたあすの桜よ鐘の声　　〃　左雀

雨の日をはつちと桃のさかり哉　　〃　舎童

一四オ

人だかりするや若草の馬の市　はじめ
さり〳〵と砂踏音や春のつき　まなひ
啼もせず一羽の雁の行事よ　雪沙
菫草咲や角力取狐の子　三夜
嬉しさを啼かもしらず帰る雁　丸々
松の葉の折ふしかゝる菫かな　杉桑
山ざくらきのふは蜂にさゝれけり　阿溪
虻多く塔に集る日暮かな　蕉兮
きのふ見し桜は花の木の間哉　黄山

一四ウ

花によき言葉づかひやあらし山　　〃　　竹有

笈摺も梨子の花ちる余波かな　　参州新城守山

花守の世上に欲はなかりけり　　〃　如竹改蟻道

咲も亦散るもよしのゝ桜かな　　〃　　一声

花守は日終人をはなごゝろ　　〃　　京夢

暮る日は雨と成けり花の山　　〃　　如岡

うぐひすやちいさき顔をあちら向　　伊勢大塚烏翠

一五オ

山里や魚洗ふ日のちるさくら　　〃　山田四溪
立のひて雲の透間の柳かな　　〃　津　蘿道

あすもこむと桜がもとのひとりごと　大坂　月居
見る物の松よ竹よと春ながし　〃　矩随
思ふさま霞め夕べのむらさき野　〃　春思
春さめもやめば世界の雀かな　〃　素鶴
夜歩行も梅散までぞ宿の猫　〃　飛良
たゝみたる傘提て春の雪　〃　文頂

一五ウ

朝ぎしや淀の縄手の草の上　〃　竹宇
まざ〳〵と夢に入けりはなの宿　〃　丁江
やゝゆふべ人さだまつてさくら哉　〃　東阿み
所〳〵花に隔つる山家かな　〃　鵞雪
桜見て居れば身に添ふ嵐哉　〃　梅兮
春風にやどりて花のきをひ哉　〃　松月庵
あるとあるものにゆずらじ山桜　〃　瓢介
一夜づゝ陰のふくるゝさくら哉　〃　米彦
見おろせば水に吹ちる桜かな　池田　ひとし

一六オ

花のちる葛家／＼も月夜かな　〃　遅春
あけぼのやしばらくありて朝桜　〃　李杏
春の夜の人ほど鳥は寝ざりけり　大坂　五寅
雨雲にわけ入花のあかり哉　〃　夜来
雨雲に匂ひうつすよ梨の花　〃　青芝
ちら／＼と人のゆきゝを啼蛙　〃　二有
旅の日のふつか暮行蛙かな　〃　升六
あけぼのは雉子が啼なり草の門　泉州左海金花
塊になづな花咲春野かな　〃　炉月

一六ウ

静さは菜の花多き木の間哉　河内富田林甫六
花曇り底には白き遠の峰　讃岐高松　履視
山中や柳の見えて家のある　〃　姫浜　桃里
馬つなぐ木にもなれとてさし柳　阿波　壺大
花に鼓研に盛見ゆるなり　〃　羽角
旅癖のいそぐぞ花にはづかしき　〃　文亭
夜は夜にて明離れたり花の雲　〃　徳島　麦由
朝露にむせてや草をたつ胡蝶　〃　子跨
春の日をありたけ見たる峠かな　〃　菅古

一七オ

草見るもよき山ざとを初ざくら　〃　青史
春さめの濡色見ばや牧の駒　〃　祇筵
一明りして日は入りぬ木瓜のはな　〃　素英
春風の雨をふくみて吹日かな　〃　仙艾
猫の恋やまず梅より桜まで　〃　子謙
水鳥の舞や霞と浪のひま　〃　鳴雄
雉子啼て今朝も寝たらぬ篠家哉　〃　雨香
昼までは常の雨なり春の雨　伊予土居五粒
あしもとに日は暮てあり春の山　〃　貫至

一七ウ

近江路や水の光りも春の色　　、　鯉登

紅梅や是はむかしの車よせ　　播州明石　桃下
ふるさとを思ひ返してうめの朝　、　遊亀
名ありげに見ゆる柳の小家かな　、　野泉
花咲て大きう成しさくら哉　、　北条　梅廬
うたがふな月夜の花のよしの山　、　姫路　竹鶯
寝そこなひ／＼草の胡蝶かな　、　判丘
食ふ物もみな春さめの匂ひかな　、　魚崎　蘇明

一八オ

はつ桜一木の松にかゝる雲　〃　石毛
山暮て桜にうしろ見せにけり　〃　鹿間　田日
角落て寝起もやすき小鹿かな　〃　女　とき
白うめのひつつく雨の葛屋かな　〃　晴嵐
見かけたる日さへ桜はちりにけり　風羅堂　千明
雨一日花のたゞ中降くるゝ　備前岡山　幽雅
夜ざくらの山に声あり嵯峨の犬　京在備後福山牛後
塩竈のけぶりは絶て梅の月　〃　志原

一八ウ

春風の吹や伸ゆく水の雲　湖東在福山羽白

夜は夜の友が来るなり花ざかり　福山　李朝

散椿しぐれの後の夜のおと　田房　桃甫

明がたや月のこちらの初ざくら　安芸小方　可友

白魚のかくれ所や江の曇り　〃　広島　宇柏

花の頃は賤がかた荷もさくら哉　防州椹野　和風

旅人に日のさす頃や梅の花　〃　亮張

柴の戸の日かげつゝみて啼蛙　〃　白松　百之

一九オ

僧正の道の工夫や花のやま　〃　古桂
大和路や眠るところにちる桜　〃　和道
雉子啼て朝から花のちる日哉　〃　小郡　古梁

よしの山花におはるゝねぐら鳥　長州赤間ヶ関憐霞
菜の花に日は沈み行小家がち　〃　冬羅
いふ事もなくて花見る山家哉　〃　亀旭
静さをたえかねてちる桜かな　〃　甫雪
牛つなぐ山のうしろはさくらかな　〃　仙梨

一九ウ

我出れば人も出て来る花見哉　　、　　羅風

孤山、昨夜大酒致、今日は不参、と申来候。

此段御しらせ申候、とありける翁の古きふ

みを得て、文台をはじめける日に

梅に月世は俳諧のふつか酔　　豊前小倉黙雷

筏士よ我もうかまん春の海　　、　　士勲

春の世や思ふ頃より雨が降　　豊後高田春坡

白藤に咲添ふる雨のしづく哉　　、　　山離

花のあたり雨は小粒に成にけり　　、日田　有篁

闇に降力は見えずはるの雪　　、　　南美　二〇オ

家／＼の花が散なりひがしやま　筑後久留米文角
面白き春を寝に行烏かな　〃　羨乎
花のちる中に散けり駕ふとん　〃　芦月
野の梅や日暮烏のふみこぼす　〃　方朗
呼声も浦もしづみて夕霞　〃　候然
年／〃＼に春は桜の曇りかな　〃　双烏
菜の花や松のかけ行人通り　〃田主丸　其成

まだ友のたらぬ時から舞胡蝶　筑前直方　此原

二〇ウ

沼道のかたまりかねつ初ざくら　寄木
雲の中に蛙啼なる夜明かな　沙牧
さくらにも浮世の埃かゝりけり　一萍
百姓に梅の咲けり麦の中　博多
野路山路匂ふや花のあさぼらけ　朝可
聞に出て松風もなし朧月　姪ノ浜
散さして花又雲に入日かな　魯々
花ざかり木の間を人の行方哉　信入
落着て花見る四十ごゝろ哉　不如
　　新延
　　未達
　　丹志
　　吟思

二一オ

あらくれし枝咲かくすさくらかな　丶吉木　此柱

ぼち／＼とつぼみの花のみしほ哉　壱岐勝本其冠

瓶にさす花のつぼみや夢ごゝろ　丶　夏貢

灘くれて蝶の行ゑを思ひけり　丶　鯉丈

其辺り石さへ痩て牡丹哉　丶　弥雄

中／＼に残りて淋し燕の巣　丶　観月

梅が香の門も過けり夜の道　丶渡良　可遊

吹とれて見れば柳の根は一つ　丶　似柳

二一ウ

十日ほど前に花さくおもひ哉　肥前大村米虫
しづかさの桜にもどるゆふべ哉　〃　微山
ちる花の中より出たり渡し舟　〃　為休
花の雲まことの雲のかゝりけり　〃　素遊
我宿のさくらに月の居りけり　〃　夜桂
白梅の中に落けり朝の月　〃　鶯羽
初空やまことに帰る人ごゝろ　〃　奇由
さくらより産れてもどる日暮哉　〃　岱鳥

二三オ

白椿暮の小雨の音すなり　〃　諫早文塘
さほ姫のあちらむいてや花の闇　〃　長崎洵美
白うめのみだれんと日のゆるみ哉　〃　吾友
夜もすがら吹れて白し梅の花　〃　士言
かたゝには残りてゐるか帰る雁　〃　宇笛
長閑さや沖行船の帆の光り　〃　三省
御手水に梅が香の添ふ夜明哉　〃　不言
一はけは絵に見る富士の霞哉　〃　如慶
長浜や雁の名残の薄曇り　〃　蘇十

二二ウ

煤わらの上にもちりて山ざくら　丶　其映
青柳や影定まりて草のうへ　丶　松涛
谷水にきゞすのこだま流れけり　丶　大峨
ふりにしは花なき所／〻＼かな　丶　祥禾
おし寄るけしきなりけり山桜　丶　雲水浅見
あり明はむかしのまゝよ花の奥　丶　丶　正阿
関守の居眠るさまや桃のはな　丶　平戸楚涯
雉子啼て野守が夢やさますらん　丶　幽貞
柳より橋に小雨の渡りけり　丶　可石

二三オ

落椿夜は雨ながらしづかなる　〃　文英
とてもなく我を埋めよちる桜　〃　有無
藤のはな終四五軒の在所にて　〃　李薫

草の戸も独りは置し花に鳥　肥後熊本羽人
高ひくのまゝに居並ぶ花見哉　〃　丹泉
初花や雲に雨もつあしたより　〃　橋巴
寝ても花起ても花のあるじ哉　〃　秋画
雉子啼てやがて日のさす野松哉　〃　貫露

二三ウ

尋ね寄る庵は花に隠れけり　淇山
けふもまた富士をうしろの柳哉　如霜
嵯峨に寝る夜は気遣はし花曇　碧泉
鶯の花に飽てや岩のうへ　朝四
三ケ月の先に落けり夕雲雀　薫河
杣が家はまだ戸をさして初桜　青岨
さくらよりまよひし道や暮の鐘　訛牛
春の日を寝に行までの烏哉　虹夕
ひき鶴の翅に動く朝日かな　白扇

二四オ

山賤のこゝろ問たきはな見かな　賦水
長閑さの枯木に見えて鐘の声　雲岱
春の雪たま／＼届く麓かな　歌山
諸鳥の声しづまりぬ春の雪　鶴桂
世に住も世をいとふ気も桜哉　栗葉
雲の根は花にもあるか曙の月　岨邑
海山の音をおさへてゆふがすみ　蓼雨
淋しがる顔にしづくや庭の花　連之
鹿を追ふ目に見付たり初桜　含章

二四ウ

何にあはゞかくあるべきぞ曙の花　素石
世を忍ぶ居士に近付花見かな　眠虎
暮のこる里かと見えて夜の花　流蛍
人あらば山の名問んはつざくら　鴻歩
行駒をしばしとゞめん岨のはな　巨水
灯火のうへまで曇るさくらかな　露好
樫の葉のちる時春はのどかなり　化養
板ンの音のとゞくさと有り花の雲　静巴
苞にして花見をあてや蘀売　暁岱

二五オ

大かたは曇る二月のあしたかな　丶　敬裘
月まてば人の欲なり花の上　丶　眠石
灯ともしに戻ればやどのさくら哉　丶　岫丸
くれぬ日を立とゞまりて花の宿　讃岐目貫竹葦

山路来て桃に宿とるうつりかな　出雲神門知井宮一釣
氷魚よりも白魚の名の覚よき　丶　花山
花は見るばかりではなし奥山家　丶　里蝶
春の雨巳が葎に降にけり　丶少年鶴寿

二五ウ

鮒売の来て鶯を誉にけり　　春蒲

若草やきのふの雨の目に見える　　燕子

青くさき柴焼嵯峨の余寒哉　　飛鳩

秋の夜のうしとやいはん朧月　　魚村

ちる音をかぞへる庵の椿かな　　波涛

開帳の札や倒れて桃のはな　　龍池

梅の枝さげて梅見に来たりけり　　古志露光

鳳巾霞の海に遊びけり　　少年惟明

縫あげにげんげこぼるゝ子供哉　　李郷

二六オ

梅がゝに駒をしづめて通りけり　杜若
草の戸や明ればすぐに花ごゝろ　吾友
明ぬうちに啼やさくらの山鳥　東廬
茶の湯気も朧かさねて春の雨　九鶴
春の雪戻りに消える瀬田の橋　少年友志
若菜うり年はいくつと問れけり　神在百丈
隣から子をかりて来よ春の雨　三都良
うつかりと花にぬれけり春の雨　玉沾
山を出て春におどろく柳かな　芦渡文節

二六ウ

花さかぬ里はなしとや帰る雁　　、大社浦安
見るうちは我もぬしなり山桜　　、小田其泉

木草にもおかで低さよ野の霞　　因州鳥取五渓
奥山に春のわけ入日数かな　　、大耳
菜の花は沢山なるを眺めかな　　、嵐洲
みよし野は踏おはるまで桜かな　　、桃丘
飽までと年／〻＼おもふさくら哉　　、如蘭
花曇山にあつめて夕暮ぬ　　、観之

二七オ

鶯の人をしづめて啼にけり　丶　飛文
難波江や芦かれ〳〵て春の月　丶　由水
嵯峨に二夕日京にも一日春の雨　丶　梅丸
篠原の方に朧の月夜哉　丶　魯仙
難波江や宵のあかりを春の水　丶　大啄
草や木は枯たる侭に春の宵　丶　大蕪

曇る夜の晴間／＼ぞ山桜　丶　唯我
北にかたぶく笠の春風　大啄

二七ウ

いかめしく帰るや雁の打むれて　我

小家かさなる坂に小坂に　啄

忍ぶ身の秋告よとて歌の題　我

尾花の苞をひらく塩鯛　啄

ちら／＼と月待友の誘ひ寄　我

四十五十は人の世の中　啄

道せばき梅の日ぐれをくゞる也　唯我

三日月に極めがたさよ春の宵　如竹

、岩井　二八オ

下戸ならぬ顔なり花に懐手　伯耆　牧牛
朧月ながれに添てまよひけり　〃　沾宵
雲のはのみだるゝが散夕ざくら　但馬舟谷　吾含
いざ出よ春の山辺の一またげ　〃　浜坂　方行
雨の柳雨の柳となりにけり　〃　豊岡　鷺橋
良ありて雁啼春の雨夜かな　作州高下　文草

松風にぬくみのうつる二月かな　丹後石川　羽三
うか／＼と手さきへ来る胡蝶哉　〃　東也

二八ウ

しづかなる家のかこひや花の山　丶　可来
草履うる家はちいさし藤の花　丶　里笛
都より弓の便りや朧月　丶　蛙水
桃桜いろをならべてけふの雨　丶　天桂
芹摘や間／＼水に雲うつる　丶　枕流
うぐひすの次第にふとる朝日かな　丶　素艾
やまぶきを折ば流るゝ小川かな　丶　巴久
星一つ尾上にすてゝ帰る雁　丶岩屋　素竹
うき雲の柳を出る月夜哉　丶　保牛

二九オ

忘れては海月にすべる汐干哉　〃　如白
かたはらにちいさき庵や梅の花　〃　柳雫
夜の明るところ見出して春の山　〃　弓木　蕭谷
藤の花筧へとゞく小雨かな　〃　加悦町　二蝶
花の山囀鳥の声深し　〃　山田　李州
思ひきや鹿狩入りて初ざくら　〃　田辺　白雪
春の草雀の友に成にけり　〃　似藻
花散て心おぼろに成にけり　〃　器一
ちる桜我が夢さむる日なりけり　〃　ミナト　蘿木

二九ウ

菜の花の都の花にあまりけり　丹波黒江其萌
出あるけば野にもあるなり梅の花　〃　大山武陵
霞めとて日の出かゝるやま路哉　〃　氷上魯縞

四五日は花にしづまるゆふべかな　宇治　恕裕
夜ざくらや梢にかゝる水のおと　〃　泰峨
春の山都の外に立りけり　〃　雪洞
一ぱいに川は流れて花ざかり　〃　馬洲
見るうちに三日月かゝる柳かな　〃　烏江

三〇オ

菜の花や袖に吹入る風もよし　〃　桐岡
桃のはなひらき初けり二日月　〃　女かめ
木食の僧にまぢるや遅桜　〃　在中

暁のやみを隠すや山ざくら　城南鷺坂山舗哺
声あらば啼べし暮の山桜　城南　化蝶
市中をはなれて花の心かな　〃　羽玉
飯しゐる膳を逃たる花見哉　〃　不蘭
夕風や二百歩退て遠桜　〃　五渓

三〇ウ

見のこした花にくるしき夜風哉　丶　李蝶
暮てある桜に人のさはぎかな　丶　良水
ちる花や地に落つかぬ夕心　丶　雲裡

飛鳥も日ごろの花のひと霞　洛　玉屑
我かげにわかれて寒し春の宵　一鳳
都から吹初にけめ春の風　斗雪
夜ざくらに苔の袂のかり着哉　呂蛤更
風骨はやせたものなり山桜　春夜
秋水

三一オ

京にても咲次第あり初ざくら　居然
傘の上まで散ややまざくら　鼠梅
はなやかに花が咲たり須磨の浦　千代道
花菫土のよごれに雨がふる　墨沖
花を見て杖を忘るゝ奥ぞかし　其峰
むく起にゆる／＼見たる桜かな　茂良
雨の暁いよ／＼青き柳かな　巴静
ひとりきて花に侘しきすり火打　木貞
満月や桜しづめる水のおと　国雄

三一ウ

松杉や小鳥の分は花に啼　百磨
花の戸やあるじがましき人もゐぬ　琴斎
昼からは烏の来たるさくら哉　松屋
此ほとり子供もおほし八重ざくら　凡仲
夕ぐれのむねにせまりしさくら哉　猶古
おしなべて花の吹雪や輿車　有国
きれたるは谷と見えけり花の山　有洛
ちる花やされども朱は奪れず　亨
咲花をあだに算へて伊勢の旅　葦笠

三二オ

葉に花の咲かさなりて遅桜　白朗
我花を人の見に来る夕べ哉　季謙
鐘もなき春のゆふべや東山　酔夫
おもふ事花に一日は預けたり　有邦
尋得し清女が塚やすみれ草　杖下
花筏緑りの川に下さばや　湖舟
鶯や児の立居に気をつかふ　金下
逢坂は夜も吹なり春の風　南岳
さびしみを見せて咲けり糸桜　魯雲

三二ウ

帰らんとすれば月さす花の中　橘仙

散花に道は分らぬよし野山　橘栄

筆とつてものゝかゝれぬ桜かな　起龍

寒ければ余所に名の立柳哉

在京越中高岡真葛

七つから低う見へけり春の水　漢水

尻がろに出て行花見上手かな　芹水

子の多き里と見えけり赤椿　布雪

野に山にかぶさりかゝる花の雲　玉桐

花のあと大堰桂の水のたけ　乙道改仏斎

三三オ

ひや／／と顔に花ちる月夜哉　芦涯
沢山に五加木もちけり花の宿　岱李
啼はなく藪の一重を猫の恋　阿年
白浜のはては梅咲小家かな　其白
梅咲て世上も春の匂ひかな　在京筑後天籟
比良の雪折々見えて帰る雁　在京加賀其如
山吹に鮓桶ひたす小川かな　古塘
風流のうかれなりけり花供養　其成
宿かりて花を見に行草履哉　在貫

三三ウ

鶯の高音に池は曇りけり　在京加賀僧北雁

朝風に取しまりたる柳かな　銀喬

初桜下行水の薄にごり　月峰

春の夜にはてなき山のすがた哉　千崖

やまざくらかろ／〻＼と夜は明けにけり　百池

かげろふの小松はなれて啼ひばり　玉洋

山水の朝はつめたし藤の花　素頑

みのを着て出る気になれや梅の花　雲水木海

山陰はみな大きなる蛙かな　馬印

三四オ

近江野や畑打までが皆馴染　田禾
初ざくらちかより見れば老木なり　蒼虬

延着

花にやどる一夜の露も春の水　伊賀上野柏舟
兀山は木の芽に寒きけしき哉　越中富山太呂
鶯や桃に来て啼京の町　〃　洞李
畑うちの休らふ土手の柳哉　〃　古洞
心ある人は見しるよ夕柳　〃　其成

三四ウ

能空を見捨て雁の行ゑ哉　　丶　二扇
のどかさやひとり物いふ山巡り　　丶　赤鳳
山寺や板戸にはしる雉子の声　　丶　六寄
花の山烏啼なり三十日の夜　　丶　相卜
山の端の近ふ見えけり鳳巾　　丶　都川
春風にきのふの山はなかりけり　　丶　歌林
あと向ば鳥の啼なり春の月　　丶　亀遊
くみあげる水のぬるみぞ梅の花　　丶　亀山
蛙飛岨に崩るゝ旭かな　　丶　深水

三五オ

春雨や自問自答の几　大坂　よし輔

琴負ふて峰に籠れり花の雪　讃州仁尾宗徳

雲とながめ雪と見かへる山ざくら　丶　笑歩

おろそかに鐘つき出すや花盛　紅石斎　里山

玉川の玉吸あげよ藤の花　信飯田　雨鴻

御幸町錦小路上ル町

勝田喜右衛門

京都書林烏丸通下立売上ル町梓

勝田善助

三五ウ

（裏表紙見返し）

（裏表紙）